

2006 年度 秋学期 教育方法学 A a

最終レポート

チーム番号：D 3

0521-0325 教育学部教育学科 2 回生

大西朱夏

レポートのレベル申告 (A)

このレポートが (A) レベルであると判断した理由

教科書と講義中で使用した文献と配布資料以外で、自分で探した 2 冊以上の文献を参考、あるいは引用し、文中と最終ページに文献情報を示しているため。

公開同意書

後輩への公開について (a)

Web 上での公開について (a)

< 目次 >

1 章：D 3 チームが構想した学校「東之園小学校」の概要

2 章：多様な学習者が主体的に学習し、一人ひとりの学力を高めるための具体的な学習指導方法

3 章：学習指導方法の評価と学習者の査定

4 章：この講義への感想や希望
難解だった一般用語・専門用語
次期受講生へのアドバイス

参考・引用文献

第1章 D3チームが構想した学校「東之園小学校」の概要

1、はじめに

現在、学校で起こっている問題は様々であり、多岐にわたっている。それは、ただ単に学力低下問題だけでなく、不登校やいじめなどの対人関係の問題、さらに学校の不審者対応など、安全対策問題等もある。また、最近はストレスを抱える子どもが増えてきており、「心」の問題もよく聞かれるようになった。

元来、学校は学力を保障する場として位置づけられてきた。つまり、社会性を育てるのは「家庭」、学力を育てるのは「学校」という枠組みが出来ていた。しかし、最近の社会状況から、その枠組みはなくなり、本来、家庭でなされるべき教育が学校にまで求められるようになってきている。

そのような問題を考慮した上で、私たちは次のような理想の学校を構想した。

2、構想した学校の概要

まず、学校の3つの特色があり、それは 相互学習、 屋上菜園、 スクールカウンセラーの導入である。それに加えて、現在の学力低下問題、社会状況に対するいくつかの取り組みも行っている。次にそれぞれの取り組みを説明する。

相互学習

相互学習というのは、教師が子どもに教授するだけではなく、子どもが子どもに教え合いながら、教える側も教えられる側も相互に、より深く学習していくシステムである。この、「子どもが子どもに」というのは、主に他学年同士で行う。また、教師は補助・助言役に徹する。実践方法としては、総合的な学習の授業などで他学年との合同授業を設ける、勉強の部屋を設け、休み時間や放課後などの授業時間外に、そこで高学年が低・中学年に教えるなどを考えている。

屋上菜園

この小学校は都会にあるという設定であるので、菜園場所の確保が難しい。そのため、普段使用されない屋上を利用して菜園を作ることにした。

屋上菜園では、都会の子どもにはなかなか経験できない、自然とのふれあいを大切にしている。また、作物を育て、作物(生き物)を育てることの大変さを、体験を通して感じ、その中で、地域の人々と交流したり、パソコン等を用いて調べる、調べ学習にもつなげたりして、子どもたちに自分で問題を発見し、解決する能力を身に付けることを目的にしている。

また、屋上に菜園を作ることにより、建物内での気温の上昇を緩和させることができるため、クーラーなどの節約にもなり、より快適な学校生活を送れるようになると思う。

スクールカウンセラーの導入

学校に常勤のスクールカウンセラーを1人以上、また、子どもたちのカウンセラー専門

の先生も1人以上配置し、学校内での問題（いじめ、不登校等）が起こったときに、すぐに対応できるようにする。また、スクールカウンセラーは月に1回、職員会議を行い、子どもたちの様子や行動を担当の先生などと共有できるようにしたり、週に1回、新聞を作り、保護者にも学校での取り組みを伝えたりして、学校（教師）や家庭、地域とも連携し、子どもたちを見守る目を増やし、問題が起こる前兆や問題行動の原因などを発見しやすくする目的もある。

また、子どもだけでなく、必要であれば、親や教師のカウンセリングも行き、学校に対する不安や、子どもに対しての悩みを相談するような取り組みも行う。

最後に、**現在の学力低下問題、社会状況に対するいくつかの取り組み**を紹介する。

（1）研究授業

教員の指導力向上のために、月に1回（必要に応じて増やす）研究授業を行う。科目は学期ごとに決める。例えば、1学期は国語、2学期は算数、などである。研究授業では、一人の教師の授業を、校長・教頭・その他何人かの教職員が参観し、研究授業後、ミーティングを行う。そこでは、その授業の修正すべきところを話し合い、これからの授業に役立てるようにする。多くの目で、また他人の目から授業を評価されることにより、教師の独りよがりな授業が減り、子どもたちにとってわかりやすい授業になることが期待される。

（2）チーム・ティーチング、少人数授業

子どもたちに確かな学力を身に付けさせるために、また、子どもたち個人の学力に沿った指導をしていくために、チーム・ティーチングや少人数授業を多く取り入れる。

ここで問題になるのは教員の確保であるが、対策として、学校のホームページや市の教育委員会を通して、また、地域の教員養成大学と連携するなどして、学生ボランティアを募集し、不足分の教員を補う。

（3）英語の授業（総合的な学習の時間）

英語はもはや、世界共通語になりつつある。ましてや、都会にある学校では、外国人と接する機会は多く、英語を使う機会は、今後さらに増えていくと思われる。そこで、私たちは総合的な学習の時間を使って、主に基本的な会話（コミュニケーション）を中心にした英語の授業を行っている。また、授業を通じ、外国だけでなく、日本の文化、環境などについて興味を持つような感性を育むことも目的の一つである。

（4）学童保育

現在の社会状況から、共働きの家庭が増えてきており、学童保育の入所希望者が増加している。そのため、私たちの学校では学童保育を設置している。しかし、年々増加する入所希望者数に対して指導員が足りないため、学生ボランティアを配置し、子どもたちを見守る目を増やしている。また、スクールカウンセラーとも連携し、いじめなどの問題に気付くような体制を作っている。

3、現在の教育問題とその対策

私たちの学校は、主にいじめや不登校などの子どもたちの「心」の問題、さらに学力低下問題に注目している。この2つの問題について考察し、対策を考える。

「心」の問題

特に最近、「心」の問題として大きな問題になっているのが、子どもたちの暴力行為の増加である。2006年度の文部科学省の全国調査では、2005年度に公立小学校内で児童が起こした暴力行為の件数は、前年度より6.8%増で、統計を取り始めた1997年以降、過去最多となったことが報告されている。(朝日新聞、2006/9/14)この調査は各教育委員会を通じて行われたものであり、実際はもっと多くの暴力行為があると考えられる。

暴力行為は、衝動的で原因が分かっていない場合が多く、解決のためには、原因の早期発見、早期対応が重要となる。そのため学校は、スクールカウンセラーなどの専門家や家庭とも連携し、解決を図る必要がある。

また、暴力行為とは反対に、いじめは減少傾向にある。先ほどの2006年度の文部科学省の全国調査によると、いじめは7.1%減であった。しかし件数で言うと、全体で2万143件であり、いじめは依然として、学校内で多く起こることであることがわかる。さらに、いじめは暴力行為と異なり、周囲に見えないようにするため、実際はもっと多くのいじめが起きていると考えられる。森田ら(2001)は、「国際いじめ問題研究会」が手がけた世界4カ国(日本、イギリス、オランダ、ノルウェー)のいじめ調査で、「いじめを誰に相談するのか」という問いかけに対して、「誰にもいえなかった」と回答した割合が、日本では他の国と比べて高いと報告している。その理由として、先行結果からは「親や先生に相談しても無駄だから」や「誰かに相談すると、チクッたといわれて、かえってひどいいじめをうけるから」といった分析がなされている。(原ら、2005)

これらの調査結果から、日本では、いじめられている子が、学校や家庭以外で助けを求める場が少ないため、ひとりでいじめを抱え込むことになりやすく、発見が遅れると考えられる。そのため、私たちの学校では、常勤のスクールカウンセラーを1人以上配置し、問題が起こった場合に対処できるようにしたり、学校内でのいじめの相談場所になったり、家庭と教師との連携役になったりなど、学校や教師では困難である対応を補うようにしている。

学力低下問題

近年、学力低下問題が大きな論争となっている。志水(2003)は、池田寛氏を中心とした研究グループが1989年に行った関西調査を元に、2001年に関東・関西調査を行った。その調査結果から明らかになったこととして、次の5つのことがあげられている。

子どもたちの基礎学力は確実に低下している。

それは、子どもたちの生活・学習状況の変化と密接に関連している。

また、子どもたちの学力には「分極化」傾向が見られる。

それは、子どもたちの家庭背景と密接に関係している。

しかしながら、そうした「学力低下」や「格差の拡大」を克服している学校がたしかに存在している。(志水、2003)

その中で、私が注目するのは、 の基礎学力低下、 の「分極化」である。

において、階級間格差が広がりつつある中で、小学校においての基礎学力定着は格差を解消するための一つの方法であるかもしれない。なぜなら、基礎学力さえしっかりしていれば、あとは応用能力を身に付けるだけで、大抵のことは勉強できると考えるからである。反対に基礎学力がなければ、いくら難しい問題を解いたところで、ほとんど身に付くことはないであろう。以上から、私は、基礎学力定着は重要であると考えます。

において、「分極化」というのは大きく2つに分かれることが分かっている。一つは「大きく低下した子(できない子)」、もう一つは「低下しても踏みとどまっている子(できる子)」である。ここで、さらに問題になっているのは、この、いわゆる「できる子」と「できない子」の学力格差が広がってきていることである。

このような、子どもたちの基礎学力低下や学力格差をなくすための対策として、まずは子どもたち一人ひとりに教師の支援の目を行き届かせることが重要である。そこで、私たちの学校では、少人数学級やチーム・ティーチングといった授業形態を取り入れている。それを取り入れることによって、教師一人の負担を軽減し、子どもたちの課題に適応した、きめ細かな指導ができるようになると思います。

また、子どもたちの中には、わからないところがあっても、そのことを恥ずかしいなど感じてしまったり、周囲に知られたくないと思ったりしている子が、少なからず存在する。そのような子どもたちは、授業中に「わからない」と言ったり、質問したりすることが少ない。しかし、そこで教師が2人いて、机間指導を行っていれば、子どもはそれほど周囲を気にせずに質問ができ、また、教師もその子にあった指導をすることができる。また、学生ボランティアが入ることにより、先生にも友達にも質問できない子どもは、学生という身近な存在がいることによって、質問しやすい、その子にあった指導ができる。

このように、子どもたちに基礎学力を身につけさせるためには、子どもたちを孤立させない授業作りが大切であると考えます。教師は、常に子どもたちの様子を観察し、何か問題があった場合には、すぐにその子の支援に入れるような授業を行わなくてはならない。

第2章 多様な学習者が主体的に学習し、一人ひとりの学力を高めるための具体的な学習指導方法

1、「多様な学習者」とは

私が考える「多様な学習者」とは、まず、学力が高かったり、低かったりし、またその中間に位置する子どものことを示す。また、それだけでなく、学習に対する意欲のある子どもやそれほどない子どもも含まれる。学習者は一人ひとりが異なった環境にあり、異なった資質・能力を備えている。「多様な学習者」とは、より良い学習を受ける為に個々の実態に応じた教育方法を求める学習者のことである。

学習者が多様になった背景として考えられるのは、大きな社会変化である。現在、日本の社会は大きく、そして急速に変化している。例えば、都市化、核家族の増加や少子化に伴って子どもたちのコミュニケーション能力が低下していることが挙げられる。また、特別な支援を必要とするLD、ADHD、高機能自閉症などの障害を持つ子どもたちが、社会に多く認められるようになるなどの社会変化から、子どもたち、すなわち学習者が多様化したと考えられる。

2、「多様な学習者の主体的な学び」とは

私が考える「多様な学習者が主体的に学ぶ」とは、「自転車」のようなものである。

なぜなら、子どもは自分の体に合った自転車に乗ることで、すいすいと各々の目的地に向けて進めるからである。どこに進むのか、どのくらいのスピードでこいで行くのか、誰と一緒に行くのかは子どもが決める。子どもが乗りやすい自転車を選び、必要があれば補助輪をつけ、ライトの明るさや方向を変えるのが先生であり、道の途中で子どもの目的地への導きを助ける標識や地図といったものが子どもの周りにはいる全ての人(保護者・先生・地域の人々)に当たると考えられる。

3、日本の子どもの読解力の実態と読解力の定義

(1) 読解力の定義

2000年、2003年と、OECD(経済協力開発機構)により実施された、「生徒の学習到達度調査」(PISA2000,2003)では、「読解力」とは、「自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発達させ、効果的に社会に参加するため、書かれたテキストを理解し、利用し、熟考する能力」と定義されている。

つまり、「読解力」とは、文章や資料から「情報を取り出す」ことに加えて、「解釈」「熟考・評価」「論述」することを含むものであると言える。これは、日本の国語教育で用いられてきた「読解」ないし「読解力」という語の意味するところとは大きく異なるので、文部科学省では、PISA型「読解力」と表記している。

(2) 日本の子どもの読解力の実態

文部科学省と国立教育政策研究所は、2000年に実施されたPISA調査と、2003年に実施されたPISA調査の結果を比較した。その調査結果によると、日本の子どもたちの読解力は、中位層の生徒が下位層にシフトするなど全般的に課題があることがわかった。また、これらの調査結果から、特に「テキストの解釈」「熟考・評価」において課題があることがわかっている。さらに、選択問題よりも、自由記述（論述）の問題で課題が多いことがわかっている。

(3) 読解力が低下した原因として考えられること

市川ら（2006）は、読解力が低下した原因として、テレビやレンタルビデオ、DVDプレイヤーなどの視覚的メディアの急速な普及と並べて、国語科における教育方法の変化に着目している。

市川によると、以前の日本の国語教育はどちらかといえば、「読み・書き」中心で、「話す・聞く」ということがおろそかにされていた。しかし、逆に今の国語教育は、「話す・聞く」を中心にされている。それは、しっかりと資料を読んで、それに基づいて発表や討論をするということではなく、ただ単に、あいさつや話し合いをするだけの、「話す・聞く」授業をしているだけなのである。

また、市川は、それに加えて、もう一つの原因を示している。それは、国語だけでなく、全ての教科において、子どもたちが教科書を読まなくなったことである。現在の学校では、予習や復習で教科書を読んできたことはほとんどないようである。また、授業では、教科書を使わずに、簡潔にまとめられた、先生の自作プリントが使われるようになり、簡単な文章を読む程度である。このような学習活動では、読解力が低下してもおかしくはないと感じる。

読解力というのは、日常生活から意識していなければ、なかなか身につかないものである。ただ、単に朝の「10分間読書」を行うだけでは、解決できる問題ではない。日常生活や学習活動、相互に働きかけてこそ、身につく能力であると考えられる。

4、具体的な学習指導方法のテーマ

まず、私たちが構想した東之園小学校のある教員の報告書では、児童は、「会話で自分の考えをしっかりと相手に伝える」、「相手の話している内容を理解する」、「感情（喜怒哀楽）を共有する」、「自分の気持ち（感情）を、適切な言葉を用いて表現する」ことができないことが指摘されている。この指摘から私は、子どもたちに足りない能力とは、相手の気持ちを理解する力、すなわち「読解力」だけでなく、自分の気持ちを言葉に表現する力、そしてそれを相手に伝える力が足りないのではないかと考えた。

そこで、東之園小学校では、4年生における国語科教育の具体的な学習指導方法、「読

解力向上のためのカルタ・メソッドを用いた取り組み」を提案した。

5、学習指導方法のモデル

この、「読解力向上のためのカルタ・メソッドを用いた取り組み」は、大きく2つに分けられる。それは、カルタを用いた自己紹介、カルタを用いた絵本の内容読解である。

ここで、「カルタ」について説明したい。「カルタ」は「マインド・マップ」とも呼ばれ、フィンランドの教育現場で使われている思考法のことである。中央にテーマを書き、その周囲にテーマから連想したことを放射状に書き込んでいくものであり、子どもたちの自由な発想を引き出す思考法である（北川、2005）。具体例は後で述べることにする。

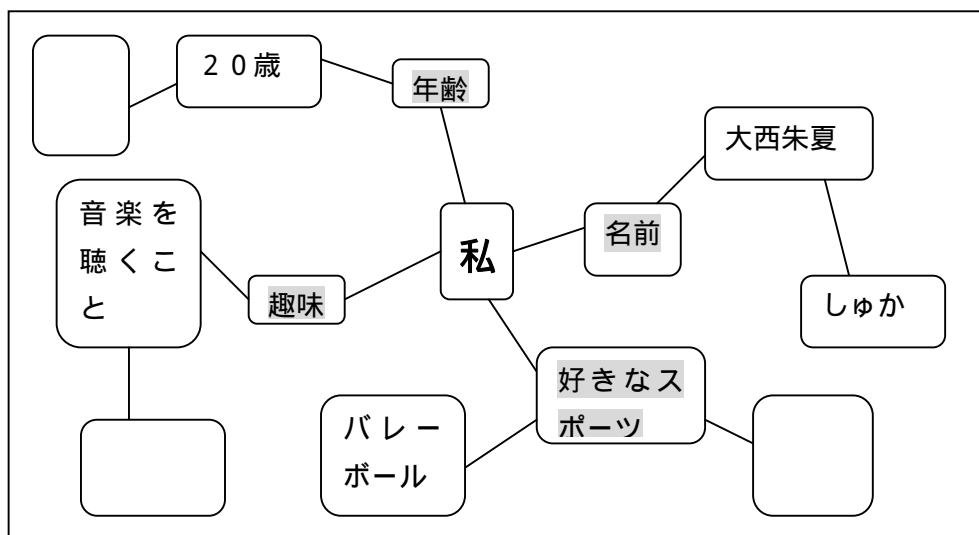
(1) 学ぶ意味

クラスの友達に自分のことを知ってもらう

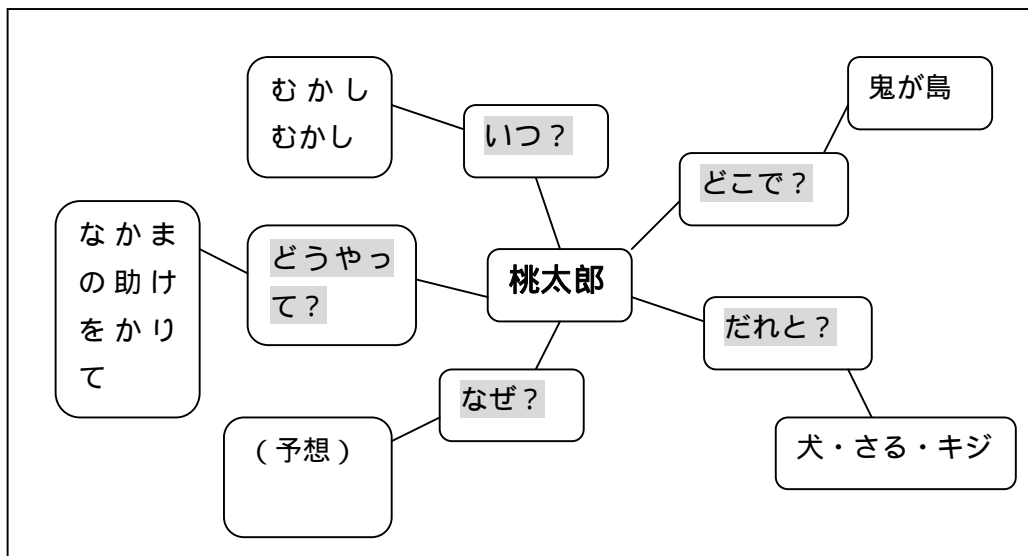
絵本の登場人物の気持ちの移り変わりを考える

(2) 学習活動

「カルタを用いた自己紹介」では、個人でカルタの中心に「自分（私、僕）」をおき、その周りに「自分」から連想することを書き出していく。そして、その作ったカルタから友達に伝えたい情報を選び、文章にまとめて発表する。下にカルタの具体例を示す。



「カルタを用いた絵本の内容読解」では、子どもたちに簡単な絵本を選ばせ、カルタを用いながら、絵本の主人公や登場人物の心情の変化やその原因を取り出す活動をする。下にカルタの具体例を示す。



(3) 学習内容

「カルタを用いた自己紹介」

自分を取り巻く環境や、自分を構成する情報を関連付けて取り出す。このとき、事実の抜き出し（名前、身長など、目に見えるもの）だけでなく、興味・関心のある事柄（好きなもの）など、気持ちを踏まえた事柄も書き出すようにし、さまざまな情報が出てくる中で、どの情報が自己紹介をする上で必要な情報かを考え、選択し、文章にしてまとめる。

「カルタを用いた絵本の内容読解」

まず、既習の教材を用いて、教師が主導して子どもたちと共に、カルタを用いた物語の主人公や登場人物の心情の変化やその原因を文章中から取り上げ、整理を行う。そして、カルタの使い方を身に付けたら、子どもたちは、自分の興味のある絵本を選び、個人で同様の取り組みを行う。

(4) 学習環境

- ・静かで自分と向き合える環境
- ・人の発表を聞くことができる環境
- ・絵本が充実している学校図書館

(5) 学習用具

黒板、チョーク、筆記用具、カルタを書く用紙、原稿用紙、絵本、感想を書く用紙

(6) 学習成果

情報を取り出し、その中から必要な情報を選択し、まとめる

文章中から、主人公や登場人物の心情の変化やその原因を取り出し、整理する

第3章 学習指導方法の評価と学習者の査定

1、どのような状態となったとき、開発した学習指導方法は成功したと判断できるか

子どもたちが、主体的・意欲的にカルタを書き進めることができたとき

カルタを用いて、自分に関することを書き出すことは、自己理解につながる。現代の子どもたちには、いじめ、自殺等、胸の痛むことがあまりにも多い。自分を肯定できず、まわりの人々を信じることのできない子どもたちが増え続けていると思わずにはいられない。そこで、自分のことについて、まず自分自身が知らなければ、相手（友達）を理解することは難しいと考え、自分の良いところを知るために、カルタを意欲的に書くことは重要であると考える。

カルタを書き進める中で出てきた、多くの情報を整理し、適切な情報のみを取り出すことができたとき

子どもたちがカルタを書き進めて行く中で、自分自身に関するさまざまな情報が出てくると考えられる。それを全て書き出すことはできないため、子どもたち自身が必要な情報を選び出す必要が出てくる。

物事を関連付けることができたとき

さまざまな情報が出てくる中で、適切な情報を取り出すことも重要であるが、それらの情報を関連付けて、グループ分けをしたり、カテゴリーを作ったりすることによって、情報を整理することも重要である。

自分の意見や考えを多くの人の前で発表できたとき

自分自身について知るだけでは、相手の自分に対する理解は始まらないと考えるため、自分についての情報を相手に発信していくことは、相手を理解していく過程と考え、そこから、相手への理解へと広げていくことが大切と考えているからである。

また、子どもたちの、授業内での自発的で、活発な発言は、子どもたちの好奇心や興味・関心を引き出すと考える。

子どもたちが発表していく中で、相手のすばらしさに気が付き、また、自分に対する肯定観を引き出すことができたとき

学校教育の一番の果たす役割は、どれだけ子どもたちに感動を与えられるかだと考える。子どもたちが、発表で友達と関わりあうなかで、友達のすばらしさに気がついたり、自分に対する自信をつけていったりしていくと考える。

カルタ・メソッドを用いて、簡単な物語の登場人物の心情の変化に気づき、その原因を取り出すことができたとき

この取り組みは国語の読解力向上のためのものであるので、読解の方法を子どもたちが身に付けなければならない。

2、開発した学習指導方法の実践において予測できる失敗例（最悪のパターン）

自分のことを相手に伝えようとしない

この学習指導方法の学ぶ意味は、「クラスの友達に自分のことを知ってもらうこと」であるため、その学ぶ意味から外れてしまうようなことは、その後の課題の取り組みにも大きく影響すると考えられる。

自主的に課題に取り組むことができない

子どもたちが自主的に課題に取り組まなければ、学ぶ意味（目的）から外れてしまうことが考えられ、さらに自分自身のことを知る機会を失ってしまうことが考えられる。

カルタがふくらまない・カルタを活かしていない自己紹介・カルタからうまく情報を取捨選択できない

単語の取り出しだけになってしまう・心情について触れることをしていない

3、何をどのような方法で調べることによって以上のような判断ができるか

(1) 何を調べるか

<自己紹介に関して>

- ・ 目的意識・相手意識を持っているか
- ・ 楽しく課題に取り組んでいるか
- ・ 相手を理解しようと思って聞いているか
- ・ 発表を聞いて、その子の良いところを発見できたか

<文章読解に関して>

- ・ 文章の内容を理解できたか
- ・ 登場人物の心情を理解できたか
- ・ 文章を基にした読解ができたか
- ・ 文章全体の整理ができたか

(2) どのような方法で調べるか

まず、現在では、さまざまな評価方法が開発されているが、田中（2005）は、「幅広い学力を評価し、保障するためには、多様な学力評価の方法を組み合わせ用いることが有効である。」と述べている。そこで、私たちは、授業観察、ポートフォリオ評価、外部参観型評価、の3つの評価を考え、この3つの評価によって、子どもたちの評価だけでなく、学習指導方法についての評価も行うことにした。

授業観察

以下の項目について、教師が授業観察によって判断し、評価を行う。

- ・ カルタを使って幅広く取り出すことができているか。
- ・ 取り出された情報から、自分に適した情報を選択することができているか。
- ・ カルタを使って楽しみながら自己紹介・物語の登場人物の気持ちの移り変わりを考えることができているか。(積極性)
- ・ 相手にわかりやすいように文章構成ができているか。
- ・ 登場人物の気持ちなどカルタを使っていろいろな方面から考えることができているか。
- ・ 原因までつなげられるところにもっていくことができているか。
- ・ 物語の本の「読書」に対する興味・関心をもつことができているか。

ポートフォリオ評価

まず、ポートフォリオとは、子どもの作品と自己評価の記録、教師による指導と評価の記録などを系統的に蓄積していくものである。また、ポートフォリオ評価とは、ポートフォリオ作りを通して、子どもの学習に対する自己評価を促すとともに、教師も子どもの学習と自らの教育を幅広く深く評価するアプローチである。(田中、2005)

(1) ポートフォリオに綴じるもの

カルタ、振り返りシート(自己紹介用と絵本の読解用の2種類)

(2) 振り返りシートの評価基準

...よくできた

...できた

...あまりできなかった

(注)×は全否定的な感じがするので、この評価には相応しくないと判断し、削除した。

(3) 自己紹介におけるシートの項目

- ・ カルタの使い方がよくわかった。
- ・ カルタがすらすら書けた。
- ・ 自分のことで新しい発見ができた。
- ・ カルタを使っての自己紹介で、普通の自己紹介よりも深く自分を紹介できた。
- ・ 発表をわかりやすく伝えることができた。
- ・ 友達のいいところを発見できた。
- ・ 友達の発表を静かに聞くことができた。

(4) 要約におけるシートの項目

- ・ カルタを使って学習したことで登場人物の気持ちがよくわかった。
- ・ カルタを使って学習したことで登場人物の気持ちの移り変わりがよくわかった。

- ・カルタの使い方がよくわかった。
- ・ほかの文章でもカルタをうまく使うことができそうだ。

また振り返りシートの自由記述として定期的に感想を文章で書かせる。それを1枚の紙につなげて貼り合わせていくことによって自分の成長の確認を図る。

外部参観型評価

我々の考える「外部参観型評価」とは、主に児童に対する学習指導方法の評価を行うものである。担任教師のみがその学習指導方法に対して評価を行うのではなく、外部の者とともに多面的な視点から評価を行うものである。

(1) 評価対象と外部評価者

- ・評価対象...学習指導方法
- ・外部評価者...保護者、地域の人々、学校教員

(注)外部評価者の選考に関しては、基本的に有志で人員を募集する。定員人数については児童の学習環境に悪影響を与えない程度に制限する。また、事前に学習指導方法の大まかな説明を行い、共通認識のもとで評価を行ってもらう。

(2) 定期的・継続的な評価

この評価は定期的、且つ継続的に行う。これにより長い期間に渡る学習指導方法の評価が可能となり、長期的な児童の発達を観察することでより確かな評価が行えるといえる。

(3) 対象の授業後の意見交換

学習指導方法の評価対象となる授業ののち、外部評価者を含めての意見交換を行う。外部指導評価方法では、評価シートを各自記入してもらう。意見交換の際には、この評価シートを参考に意見交換を進める。評価シートの記入内容以外にも、学習指導方法の改善点などの意見交換を行う。また、評価シートはファイリングし、学校で保管する。ファイルは随時閲覧可能であり、保護者・地域の人々がいつでも目を通すことができる。

(4) 評価シートの項目内容

評価シートには学習指導方法における重要なポイントの評価をすべく、いくつか必須の項目を立てた。また、その他の気付きや改善点などを記入する欄も設けている。

評価規準

1：大変悪い、2：悪い、3：普通、4：良い、5：大変良い

評価項目

- ・ワークシートのカルタは広がりを見せているか。
- ・子どもたちは楽しんでカルタに取り組んでいるか。
- ・教師の発問はカルタに広がりを見せていたか。

4、学習者はどのような方法によって自分の成長を確かめることができるか。

子どもたちは、「評価」と言われて、何を想像するのであろうか。ほとんどの子どもたちは、「点数化できる評価」ではないだろうか。しかし、その一方で、興味・関心・態度などの、「点数化できない評価」を求める子どももいるであろう。つまり、子どもたちは、「点数化できる評価」だけでなく、「点数化できない評価」、どちらも感じ取って、自分の評価を自己判断していると考えられる。そこで、東之園小学校では、外部参観や授業参観等の振り返りシートや子どもたち自身が判断した自己評価シートによって自分の成長を確かめられるようにし、また、今まで書きとめておいたものをファイリングしてポートフォリオを作るため、自分の学習達成度も確認できるようにしている。

第4章 この講義を振り返って

1、この講義の感想

半年間、この講義を受講してきたが、始めは不安しかなかった。私たちのチームは司会の意見が全て通ってしまっていて、他のメンバーはその意見に反対の意見を持っていても、司会だから...と言えずにいて、イライラしていた。そのまま、学校説明会が始まってしまい、司会との意思疎通ができず、準備が不十分であったため、説明が十分にできなかった私たちのチームは、他のチームにさまざまな指摘をされてしまった。そこから、私たちのチームのメンバー全員は、「これではだめだ!」と思い、私だけでなく他のメンバーも、司会に対して自分の考えや意見が言えるようになった。そこから、私たちのチームは、一致団結していった(と思う)。

この講義では、「自分の意見は、声に出して言わないと伝えられない」ことを学ぶことができたと思う。講義の始めの方で、私が司会に対してイライラしていたのは、実は他人に対して意見を言えなかった、「自分」に対してイライラしていたのかもしれない。

しかし、この講義で始めに決めていた、「司会」「情報技術」「記録整理」「計画管理」「音読確認」「学習報告」などと役割分担を決めてしまうことは、どうなのかと感じた。始めに述べたように、司会は「司会」であるがゆえ、自分の意見を発言しやすい。そのために、他のメンバーの意見を聞こうとせず、自分の意見を押し通すことも考えられる。また、他のメンバーの意見を聞いたとしても、「決定権は司会にある」というような雰囲気を感じられ、チーム学習は円滑に進まない原因になりうるとも考えられる。「役割分担」全般について反対しているのではないが、1回目の講義で出した、「コミュニケーションタイプ」を参考にしてチーム分けしても、2回目の講義で「個性と我」について議論しても、役割分担をよく理解していないと意味がないと感じた。

2、難解だった一般用語・専門用語

・「個性と我」...講義中には意見がまとまらず、メンバーそれぞれバラバラな考えをもっていたと思う

- ・子ども中心主義
- ・教師主導主義

3、次期受講生へのアドバイス

チーム学習は、始めはほとんど上手くいきません。議論をしても、意見がまとまらずイライラすることが多いです。でも、自分の意見を言ったり、自分の意見が言えずに黙ってしまうような人に話を振ったりするだけで、大きく変わります。自分の意見を受けいれてもらえないんじゃないか、と思うかもしれませんが、自分と同じく、教師を目指し頑

張っている人たちばかりです。絶対、人の意見をバカにしたりする人なんかいません。勇気を出して自分の意見を言って、そして、他人の意見を受け入れて下さい。それを繰り返すだけで、大きく成長できる場だと思います。

参考・引用文献、URL

- 朝日新聞 2006年9月14日 朝刊 1面 「児童、教師へ暴力38%増」
森田洋司監修(2001) 「いじめの国際比較研究」 金子書房
原清治, 山内乾史, 杉本均編著(2004) 「教育の比較社会学」 学文社
京都府教育委員会「京都式まなび教育推進プラン」
<http://www.kyoto-be.ne.jp/gakkyou/manabi/manabiindex.htm> (2006.10.23 アクセス)
志水宏吉(2003) 「岩波ブックレット No.611 公立小学校の挑戦 「力のある学校」
とはなにか」 岩波書店 (P.8)
文部科学省ホームページ(PISA調査結果)
http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/001/04120101.htm (2006.11.26 アクセス)
市川信一(2006) 「学力論争における国際学力比較調査の役割」『日本の教育と基礎学力
危機の構図と改革への展望』 明石書店
北川達夫(2005) 「図解 フィンランド・メソッド入門」 経済界
田中耕治ら(2005) 「新しい時代の教育課程」 有斐閣アルマ (P.197-198,204)